

カンキツの計画的密植栽培の実証試験成績

(第5報) 増収樹冠拡大期中期までの取扱い方について (1)

長田一美・中野孝美・田中武人・和田洋之
(福岡県農業改良課)

OSADA, K., NAKANO, T., TANAKA, T. and WADA, H.
Trials on High Planting Density on Quick Increasing of Yield in Citrus Orchard.
(V) On the Management for Young Tree Age (1).

温州ミカンの計画的密植栽培における結実開始2年目から増収樹冠拡大期中期にいたる取扱い方について報告する。

材料と方法

早生温州を供試し結実開始年の春以来、結実本位の無〜軽せん定にした区と、当初から整枝本位の慣行せん定を続けたものについて8年生(結実開始後5年目)まで比較検討した。

結果および考察

1. 結実2年目のせん定は、極く軽く行うことによって結実をよくし、収量を増大させることができた。それ以降もせん定を最少限にすることによって樹の生長をよくし、樹冠の拡大と葉数の増加を速やかにし、結果量を逐年、急速に増すことができた。

2. しかし、7年生頃から隣接樹と枝葉が接し樹冠の内部無効樹容積が生じはじめたので、ここで側枝の切返しと内部枝の間引きによる整枝をかなり加味したせん定を行うようにした。そのため、樹冠はかなり縮小し、葉数や収量もそれに応じて少なくなった。そこで、これまで常に下位にあった慣行せん定

区が8年生の時点では樹容積、葉数、収量ともに追いついた。

3. 慣行せん定区が、それまでに樹冠拡大や結果量などが劣ったのは、整枝本位のかかなり強いせん定や結実初期の樹冠上部 $\frac{1}{2}$ 摘果法により、樹冠下半部のみで結実させたために下枝の発達拡大が不充分であったもの、その要因の一つである。

まとめ

1. 永久樹と間作樹の取扱い方については、これまでの経過からみて、増収樹冠拡大期未まで区別管理して永久樹のみ樹冠拡大を急ぐ必要はなく、ほとんど同様に取扱うのが、樹冠拡大を早くし、全体の樹冠占有率を早く高めて収量も多く実用的である。

2. 当初から結実本位の極く軽いせん定を続けたものは、隣接樹と枝葉が接するようになる増収樹冠拡大期中期において、長、下垂化した側枝の短縮を行って、一旦、樹冠を縮小し、併せて内部枝の間引きを行い樹形を整えるようにつとめる。その後、樹冠拡大により再び隣樹と枝葉が接するようになったら間伐にかかるのがよい。

第1表 樹容積・葉数・ならびに収量の推移

区分	項目	樹令				せん定変更	7年生	8年生
		3年生	4年生	5年生	6年生			
改善 せん定区	樹容積(m ²)	1.2	5.3	10.0	10.9	軽せん定区 無せん定区 () カットせん定区 ()	9.9 (11.9)	8.3 [7.3]
	葉数(枚)	1,000	4,500	9,000	13,000		14,600 (15,800)	9,657 [8,650]
	収 1本当り(kg)		8.0	28.0	50.4		44.3 (44.5)	36.8 [34.0]
	量 10a当り(kg)		1,064	3,727	6,703		5,892 (5,912)	4,896 [4,523]
慣行 せん定区	樹容積(m ²)	1.2	4.0	7.4	9.3	継 続	8.7	8.6
	葉数(枚)	1,000	3,000	6,500	9,500		11,160	10,217
	収 1本当り(kg)		4.0	14.0	35.2		31.2	41.7
	量 10a当り(kg)		53.2	1,862	4,681		4,159	5,542